バディのいた風景

浜松春日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バディのいた風景

【Ｎコード】
Ｎ００９８Ｙ

【作者名】
浜松春日

【あらすじ】
２０ＸＸ年ー異世界に空間転移してしまった日本では、長引く戦争に国民の不満は溜まる一方だった。そうした中、政府は不足する自衛隊の戦力を補強するため、異世界で迫害されてきた亜人種の難民達から志願者を募ることを決定してしまう。異種族が自衛官になることに戸惑いを感じる新入隊員達だったが、日本人が守ろうとしない日本を守ろうとする亜人種の若者達との共同生活を通じ、次第に絆を深めていく。そんな中、大陸での治安は悪化の一途を辿り……
※「箱庭のメイド達」と世界観を同じくしますが、そちらを未

読でも全く問題ありません。

第1話　年表（前書き）

ケモノ耳の男の娘……じゃなくて男の子がちょっと気難しい現代っ子な新入隊員とかけがえのない絆を結ぶ過程を描いています。作品のテーマとしては徹頭徹尾「切ない男達の絆」に焦点を当てています。自衛隊という特殊環境だからこそ成立する友情などを描いて行けたらと思います。もともとは２００６年くらいに書いていたのですが未完のまま放置していたものですが、せっかくなので掲載いたします。

第1話　年表

＜年表＞

1年目

九月二十日深夜
日本、海外・衛星との全情報の交信途絶。

九月二十三日
日本国政府、国民に向けて非常事態を宣言。

九月二十四日
消失した韓国付近海域を捜索中の海上保安庁巡視船、正体不明の飛行生物の襲撃を受け大破。

同日
航空自衛隊のスクランブル機、
巡視船を襲撃した飛行生物の群れが福岡に接近したために航空総隊司令官の判断により威嚇射撃を実施。
尚も進路を変更しなかったため、一匹をミサイル攻撃し、撃墜。
群れは進路を変更し、領空外に退去。

統合幕僚長三自衛隊に非公式の防衛出動待機命令。

佐世保、呉、横須賀の自衛艦隊が日本海側に緊急展開。

国会では、武力行使と防衛出動待機命令はやりすぎであり、撃墜したことにより中立的立場を失ったとして議論が紛糾。

責任をとって命令を下した航空総隊司令官が辞任。
一後に飛行生物の所属はヴェロスニア帝国疾空竜騎士団であったことが判明。

九月二十六日
海上自衛隊護衛艦、正体不明の大陸を発見。
現地人と接触。

同日
国民へ異世界への召喚の事実を緊急発表。

十月一日
反帝国陣営の各大使との会談が実現。
報道管制が敷かれ、この際に話し合われた内容の詳細は不明。
反帝国陣営は日本への無償の食糧支援と資源提供を約束。
後に自衛隊の軍事協力と引き替えであったことが判明し、国会で内閣不信任案提出気運が高まる。

十月十日
政府は資源確保のために特別対策室を設置。
本格的な大陸からの資源調達が始まる。

十月十一日〜
北部方面隊と第一空挺団を中心とした陸上自衛隊一個師団の大陸への投入開始。

国会で内閣への不信任案が提出されかける。

同日
ヴェロスニア帝国、日本へ宣戦布告。
ヴェロスニア帝国植民地に大使として駐留していた外務省外交官二名が、
皇帝直属の過激派騎士により惨殺される。

十一月二日
大陸の南部の反帝国陣営の国境線を帝国軍十万名が越境。レステリア平原に待機中の陸上自衛隊一個師団七千名と衝突。

日ヴェ戦争開戦。

特科隊による砲撃とヘリによる航空攻撃で勝敗は二時間で決する。
夜間、戦車隊による突撃により完全に帝国軍は瓦解。

十一月三日
帝国軍、死者約四万五千名を出してレステリア平原より撤退。
自衛隊側の死者は四名。
後に精神病を患う隊員が続出する。

この後数ヶ月間、キレシュト山脈を超えるまで帝国軍は相次いで潰走。

2年目

五月十八日
日航ジャンボ機二三一便、突如進路を変えて大陸内陸部に不時着。
帝国、乗客を人質に自衛隊の大陸からの撤退を要求。

五月二十二日
陸上自衛隊の混成部隊が人質救出のために作戦開始。
魔法都市ネリェントス事件発生。
自衛隊員の死傷者多数。人質の大半は死亡が確認される。
多大な犠牲と作戦計画の杜撰さが国会・メディアで大きく批判され、
事件の責任をとって統合幕僚長が辞任。

六月
ネリェントス、再編成された陸上自衛隊第七師団の突入により陥落。
その後、補給の遅延と兵力不足により戦争は双方とも膠着状態に突入。

九月十日
帝国軍、浸透工作員の一斉蜂起に呼応し反攻作戦開始。
自衛隊、戦線崩壊。
政府、大陸北部の放棄を決定。

笠間直人衆院議員の独自の働きかけ等により、中立的立場をとってきた在日米軍が参戦。
後に大陸で不法渡航していた笠間議員の娘を救う目的であったことや、
不透明な米軍との間に交わされた協定の存在が暴かれ、問題となる。

十月までに米軍の参戦により帝国軍反攻軍はほぼ沈黙。
後に帝国は大陸から完全に撤退。

九月二十五日
停戦協定のための帝国大使一行、日本本国の外務省に突如来訪。
帝国と日本、停戦協定成立。
事実上、日ヴェ戦争は終結する。

十月一日
諸々の責任を負い、内閣は総辞職を表明。
後継内閣、大幅な政策転換を打ち出す。
この後、派遣自衛隊の規模は縮小されるようになる。

十一月
亜人種など日本国籍を有さないが日本に対して忠誠を誓う者を自衛官として採用し、
危険地域への進出にあてる外人志願者制度の募集開始。
世論の支持率は賛成四割、反対二割、分からないが四割。

3年目

三月二十日
第一期外人志願者新隊員、入隊。
教育隊で一般新隊員と訓練を共にする。

七月三日
大陸南部で新興国家群が邦人を人質に、日本国政府に完全な独立と食糧・資源徴収の取りやめを要求。

自衛隊部隊とにらみ合いとなる。

その他一部地域に不穏な兆候が見られたため、
防衛省は牽制として、教育中だった外人志願者部隊を招集・編成し、
ロスーキ都市国家群へと急派。

七月十七日
ロスーキ都市国家群、日本に宣戦布告。
同時に大陸方面隊第一混成戦闘団（外人志願者部隊）の先遣隊二百名を虐殺。

そして、本隊は四万を超える軍勢に包囲される……

第2話　柵の中で

？バディのいた風景？

＝大陸の地に散った日本人ならざる日本人達に捧ぐ＝

―数ヶ月前

某県某市　　陸上自衛隊某教育隊

僕、竹内孝明が自衛隊に入隊した理由は三つあった。
一つは、三年前に召喚された日本が大陸の覇権、というより資源確保のための『帝国』との戦争に事実上勝利したこと。
事実上というのは、？停戦？ならば受け入れる用意がある旨を帝国特使が日本国政府に伝え、
消耗しきっていた双方は『帝国』の大陸からの撤退という譲歩により戦争の一応の集結を見たからである。
ネリエントス攻略作戦失敗や、その後の笠間議員の在日米軍密議事件で世間が揺れている頃の話だった。
もう一つは、不景気だったこと。自分のような高卒に、各種手当てのついた公務員の身分は魅力だった。戦争さえないなら特にだ。
最後に、これがもっとも大きかったのだが、自衛隊で純粋に特殊な経験をしてみたいという冒険心だった。
これは戦時中から考えていたことで、学校では変人扱いされていたけれど、
将来特に何かやりたいことがあるかと聞かれれば何もない僕にとって、
戦争さえなければ自衛隊はこの世界のあちこちに行くことのできる数少ない職業であり、それはとても興味のそそられるものだった。

あえて並べればこんなものだが、正直なところ、
大学で勉強する熱意もなく、かといってニートにもなりたくはない、というあまり誇れた動機ではなかった。
そんな自分だから、教育隊では地獄を見るという漠然とした不安もあった。
けれど、入隊してから僕を待ち受けていたのは、予想外に早い、未知との遭遇だった。
そう、僕が知らない内に、この日本という国は、色々と試みていたみたいで……

今日は教育隊に来て二ヶ月のもう夏真っ盛り、つまりそろそろ野外総合演習や期末点検も近づいたある日だった。
訓練場に区隊集合している僕はどこか物寂しげなラッパ吹奏を聞きながら、降りていく日の丸に不動の姿勢で敬礼をかざしていた。
一個中隊が揃って遠くの国旗に向かっている様子は、客観的に見ればかなり壮観ではないかと思う。
国旗降下の終わりを告げる小気味いいラッパを聞いて、各班ごと解散、という区隊長の言葉に班長らがそれぞれの班員に課業終了を下達していく。
真夏の暑さに首筋に汗をかき、睨むような表情ばかりだった新隊員らに笑顔が咲く。
国旗降下が終わった後、新隊員のやることは決まっているのだ。
飯か風呂かＰＸ。班当直や区隊当直、中隊によっては中隊当直を除く新隊員らにとってのリフレッシュ・タイムの始まりだ。

「レプ！」

僕は振り返ると真っ先に後列の『バディ』に声をかけた。
後列に『バディ』を並ばせるようになったのは、別に日本人が格上だとかいった理由ではなく、
教育隊として、どう見ても斉一にならない？異種族？混成の『バディ』を前列に並ばせるわけにはいかなかったからだ。
僕の声にピクンと耳が反応した『バディ』がこちらに跳ねてくる。

「あい！　　レプ二士！」

たどたどしいが、元気に満ちた言葉で応えたのは、僕のバディ、レ

プだった。
一見すると十三、四歳くらいの赤毛の少年に見えるレプは、作業帽から可愛らしい犬耳をぴょこりと覗かせ、
尻にはふさふさの尻尾が、特別に切り込みを入れられたズボンから生えている。
彼は『ワーウルフ』……獣人族の一人だった。
他の隊員、つまり僕の同期達も、自然とそれぞれのバディと連れだって思い思いの課業後の予定を話していた。

「俺達食堂行くけど、他行く奴いねえ？」

同期の一人が声を上げた。

「……今日の献立は何だ？」
「おめえらエルフ好物の野菜カレーだぜ」
「……共に行こう。我が盟友よ」

エルフ族のセティスが随分と堅苦しい言葉遣いで言うと、彼のバディの坂本が苦笑する。
食堂へ行く六人が、ジャンケンで指揮者を決めて隊列を組んで歩いていく。指揮者はダークエルフのルシスだった。
教育隊では、屋外での単独行動は基本的に禁止されている。
必ず、二人以上で隊列を編成し、指揮者を立てて歩調を合わせて目的地に行進せねばならない。
面倒この上ないが、それも教育の一環で、それで金をもらっているのだから仕方がない。
しかし、自衛隊の深緑の作業服姿で美しい顔をしたエルフやダークエルフ、獣人族などの多種多様な種族が、
一様に歩調を合わせて歩いている光景は異様なものがあった。
僕たちはもう見慣れたが、二ヶ月前ほどではないにせよ今でも外柵

沿いにはマスコミの車などが止まってカメラを向けていた。
日本が召喚されてから諸々の事件・事態の責任を負って前内閣が総辞職した後に新しく就任した内閣は、
反戦融和政策を打ち出し、管理下にある大陸からの難民受け入れなどを積極的に行った。

前政権が国を守るために必死になって半鎖国政策をとってきたのを、資源問題も解消に向かいつつあり、更に戦争が事実上集結したとなっては意味を成さなくなり、
召喚された日本は大きな転換期を迎えていた。
戦時中から問題だった広大な大陸の管理（支配・統治という言葉はタブーらしい）
のコスト増大と自衛隊の兵力不足にも抜本的な解決策を検討するとし、その一環として採用されたのが『外人志願者制度』と呼ばれるものだった。
危険な大陸の未開地へ正規の自衛隊員を派遣するリスクというものを今までに思い知らされてきた政府は、
日本の絶対防衛圏内のみに正規自衛隊部隊を配置し、その他は特務部隊によって維持・管理すべきだとの防衛大綱の見直しが決定されたのだ。
特務部隊とは、少数の正規自衛官を指揮官とし、その隷下に日本国に忠誠を誓った異種族の隊員を置くという前例のない試みだった。

国会やメディアでもこれは大きく取り上げられ、日本国籍を有さない他民族に武器を持たせることの危険性や法的な不備について議論が紛糾した。
しかし、予想外に国民世論は割れた。反対意見の方が若干ではある

が少なかったのである。
ネリエントスや停戦間際の帝国の乾坤一擲の反撃による死傷者の数に、
国民に一部の反戦団体のような偏ったものではなく、全体として厭戦意識が上昇していたため、
何より大幅なコスト削減により自分達の税負担の少なくなるこの制度への支持率が高まったのだ。

戦後、自分の国を守るのに自分達の血を流さない伝統は、ここでも生きていたのかもしれない。
教え子を戦場に送るな、と叫んでいた団体は、この制度に反対としながらも、かつてのようなデモや抗議をしなかった。
自分の教え子でなければ、誰が死のうがどうでもよかったのかもしれない。
いや、どうでもよくはないが、命の優先順位はあくまで日本人が一番であり、異種族は二の次だったのは事実だろう。
命に貴賤はないと叫んでいたのは、いったい誰だったのだろう。そう感じる者は多かったが、口に出しはしない。
誰もが自分の血を流さず、税の負担も少ない夢のような案を否定できない立場にあったのだ。
戦争というものが現実の存在となったとき、理想論がどれほど無力なものかを思い知り、打ちのめされていた日本人に浮上したのは、
自分の国は自分の手で守ろうと立ち上がる気概ではなく、いかに自分の手を汚さずに身を守るかというエゴイズムだった。

「間隔ほちょー数えっ」

唱うような美声で、ダークエルフが歩調を取っているのが聞こえる。
可決されるまで、日本人の誰もがこの制度の決定的な問題点を懸念していた。そう、果たして志願者が集まるかどうかというものだ。
帝国を撃退したはいいが、管理という詭弁を弄し、実効支配を敷くこの日本という国の自己中心的な国家政策に、
賛同するこの世界の人々がいるわけがない、というのが一般的な認識だったのだ。
しかし、予想を大きく裏切り、志願者は殺到した。
試験採用枠二千に対し、志願者の数は二万を超えていた。
主として獣人族・ダークエルフ族・淫魔族・吸血鬼・領海内の一部マーメイドなどで、
志願種族は全部で二十種族に登った。種族全体で動ける者全員が志願した部族さえあった。
しかし、マスコミも取材はするものの、あまり大きく報道することは無かった。
後ろめたかったのだ、日本人の誰もが。いや、後ろめたいのではない。情けないのかもしれない。自分達の手で自国さえ守れないという事実に。
かつて発足したばかりの自衛隊がそうであったように、彼ら外人隊員達に、国も国民も無関心を決め込んだのだった。
戦争が終わったのが大きかった。国民の大多数は再び国防から関心を失いつつあったのだ。生々しい現実から目を背けたかったのだろう。
日本人は昔から、臭い物には蓋という、血の教訓を次に生かせない民族だった。
そんな国のために、命を捨てる覚悟などする気は、僕には毛頭ない。
自衛隊に入ったのも、就職難だからで、別に国が守りたいわけでは

なかった。

しかし、二ヶ月を過ぎて、僕の心には、自分自身言い表しようのない違和感のようなものが芽生えていた。

「わぅー！　レプもかれーは大好きですぅ」

パタパタと尻尾を振りながら、レプが僕を見上げてくる。頭一つ分、彼とは身長差があった。

なら一緒に行けば良かったのに、と思うが、それが彼の僕への気遣いだというのは分かっているから、あえて何も言わない。

『バディ』　自衛隊で使われる、運命共同体となることを義務づけられた二人組の呼称。

日本の旗を持つ以上、自衛隊員として、そして日本人としての最低限の素養が必要だとされた彼らには、

三ヶ月の教育期間が設けられ、そこで正規の新隊員と共に教育を受けることでそれを身につけることになった。

その一期生の一部が編入されたのが、僕の教育隊、それも僕のいる中隊だった。

「レプ、カレー食べたいなら今日ＰＸ食堂の方でカツカレー安い日だよ？」

「わぅー！？　それは本当なのでありますか！？」

「……昨日話したばっかりだったろ？」

ＰＸ行く奴いねえ、との同期の声を聞き、そちらに歩いていく。

……会った時のことを思い出すと、この二ヶ月で彼らと僕たちは驚くほどの強い絆を持ったように思う。

新隊員過程を異種族の世話をしながら過ごすなど聞いていなかった

僕たち第二中隊の新隊員らは当初、
彼らと初めて会った時、どう接すればいいかわからなかった。
先に隊舎について居室で待機していた彼らとの体面。
僕の場合、レプとの出会いは、後から他の同期に聞いた話と比べれば、すんなりとしたものだった。

?君が……レプくん??

居室に入った僕の目に飛び込んできたのは、まるで野良犬のように窓際のベッドの一つに丸くなって寝ている可愛らしい少年の姿だった。
気配に気付いた彼は、目にもとまらぬ身のこなしで跳躍し、僕の目の前に着地すると、犬が行儀よくお座りしたような姿勢で、
私物の入ったバッグを抱えた僕を曇りのない真っ直ぐな瞳で見上げた。

?あい！　よろしくおねがいいたします！　ごしゅじんさま！?

今振り返れば、すんなりとはいったけど普通ではなかったな。
でも、他の同期達のように、高慢なエルフに?貴様は我が盟友にふさわしくない！?なんて言われなかっただけ良かったのだろう。
彼らとの生活が始まってから、いざこざは絶えなかった。
数え上げればきりがないが、レプに限ってみれば、まず、入浴の風習がなかった。
獣人族であり、流浪の民の出身の彼は、生まれてからずっと水のほとんどない砂漠で育ったため、
日本に来るまでバケツ一杯以上の量の水をみたことさえなかった。
出会った初日、班長に引率されて行った浴場で、
身体の洗い方をまるで幼児に教えるように教えてやったのが、レプ

との関係の始まりだった。

?:たーいんわ、わがくにのへいわとドクリツを守るジエータイのシメイをジカクし……つねにとくそーをあきない……?

?:そこ、あきない、じゃなくて、やしない、だよ?

?:わうー……ムズカシイ?

自分も右も左も分からない新隊員で忙しい中、レプの面倒まで見なければいけない生活は想像以上にハードだった。

エルフ族やダークエルフ族などと違い、人間らしい教育をほとんど受けていないレプは特に無知な分野が多かった。

飲み込みは早いものの、時としてそれは僕を苛立たせ、思わず彼に辛く当たってしまうことも多かった。

?:タカアキ……この教程にかいてあること……?

?:それくらいなら隣の居室のダークエルフのあいつに教えてもらいなよ。あいつは字が読める?

?:わぅー……アイロンかけてる途中だから話しかけられなくて?

?:僕だって今は靴磨いてんだ!　いちいち俺なんかに頼るなよ!!?

最初は僕に限らず、バディの世話に不満を漏らす新隊員は少なくなかった。

しかし、それは入隊式を境に次第に少なくなっていった。理由は一つ、過酷すぎて互いに支え合わねばやっていけないことに気付いたからだ。

そう、彼らと同じ柵の中で……

第3話　戦闘訓練

僕にとってそれが具現化したのは、戦闘訓練が始まった頃だった。
総合訓練場での血反吐を吐くような戦闘訓練の後の隊列を組んでの駆け足の中、
体力の限界に達した僕は今にも倒れそうな状態でよたよたと走っていた。

?竹内ぃ！　てめえ何さぼってんだ？　あぁ？？

班長の怒号と共に、蹴りが尻に叩き込まれる中、隣にやってきたのは、レプだった。

?タカアキ、ショージューを……？

死にかけている僕を心底心配そうに覗き込み、そっと僕の手から小銃を取り上げる。
ずしりと重いこの六四式小銃さえなければ、ただの駆け足でしかない。なんとか僕はその日の訓練を乗り切った。

?……ごめん？
?わう？？

訓練後の武器手入れの時、僕は思わずそう呟いていた。
レプはずっと二丁の小銃を抱え、僕の横を併走してくれた。励まし続けながら、決して見捨てることなく、嫌な顔一つせずに。
冷たく当たる僕を、何の打算もなく支えてくれた。僕はその時初め

てバディの意味を理解したのかもしれない。

?わぅ……ひきがねしつぶの組み立て……?

?貸せよ?

?わぅ??

?ったく、なんでこんなややこしい造りになってんだろな、この銃は……ほら、できたぞ?

?……ありがとうタカアキ?

?いいよ、こんくらい?

レプと僕はそれ以来、何をするにも一緒だった。

最初は面倒に感じていた日本の生活の指導も、今ではむしろ楽しいくらいだった。

レプは、純真無垢な少年だった。

僕は今まで、ここまで真っ白な心を持った人間を見たことがない。

喜怒哀楽を隠さず、誰かを騙したり、陰口を囁いたりせず、無条件に人を気遣い、とるに足りない些細なことに感動する。

僕は親友というものを、どこか嘘くさく、馴れ合いの中に生まれる幻影のように感じていた。

今では、それが自分が誰も信じず、見返りがなければ人と関わりを持とうとしない心の貧しさゆえに、

親友というものを持ったことがなかったからではないかと思うようになっていた。

自衛隊という閉鎖世界で、過酷な生活と訓練に忙殺される中、人との関わりだけではなく、人を頼り、同様に助けなければならない環境。

それは人は一人では何と無力なことなのかを思い知らせ、そして、人は一人ではないから大きなことをなしえることを肌で理解させる。

レプは、僕が生きてきた十八年で、初めてできた親友なのかもしれなかった。

「タカアキ。カツカレー！　　かつかれー！」
「はいはい。分かったよ」

僕らはＰＸに向かって行進を開始した。
身長差は関係なく一分間百二十歩、歩幅は七十五センチ、腕の振りは前に四十五度、後ろに十五度。
指揮者はレプだ。
バカバカしい、自衛隊の教育隊の風習。何をするにも集団行動だ。

「タカアキ、明日はどこへ行くわぅ？」
「お前はどこ行きたい？」
「わぅ！　もっかいエキマエの焼き肉食べ放題に行きたい！」
「いつもいつも安上がりな外出だなぁ」
「わぅ？　嫌わう？　あ、お疲れ様です！」

すれ違う三曹にぴしりと敬礼をするレプ。
上官に欠礼は許されない。指揮者になって雑談しながらそういったことにきちんと気を配れるようになれば、自衛隊生活が馴染んできた証拠だ。

「タカアキ殿、レプ」

背後から隊列に加わってきた同期の姿に僕は後ろをちらりと一瞥する。
ダークエルフの志願者、ルールカだ。
まだ少年の幼さを残す、僕らと同年代の新隊員だった。班は違うが区隊が同じだから、レプほどではないが仲の良い相手だった。

僕の班の十二名の内、六名が亜人種などの異種族だった。
獣人のレプが一人、ダークエルフが二人、エルフが一人、インキュバスが一人、竜族が一人だ。
異種族が半数を占める僕の所属する第二教育中隊は、他中隊から『ゲテモノ中隊』と蔑んで呼ばれ、
柄の悪い他中隊隊員との間で乱闘騒ぎが起こったこともあった。
食堂で列に割り込んだ他中隊員をハーフエルフの隊員が注意したところ、
日本人様に指図するんじゃねえ、と相手が逆ギレし、
その態度に激昂したハーフエルフのバディの隊員がそいつに掴みかかったのを発端に、
不良隊員達と『ゲテモノ中隊』こと第二中隊との間で警衛隊が駆けつける程の全面戦争に発展したのだ。
精霊魔法がテーブルをひっくり返し、ビースト化した獣人たちが不良どもを千切っては投げる阿鼻叫喚の修羅場だった。
中核になっていた二十人が警衛隊に捕まったが、何故か特に罰はなかった。
第二中隊長の棚村一尉は、若い頃を思い出して実に爽快だったぞ、我が中隊の圧勝だったようだしな、
とその性格ゆえに三佐に昇進できないという噂を肯定する言葉を翌日の中隊朝礼で残し、それ以来このことは一種のタブーになった。
喧嘩では第二中隊に勝てないことを証明したと一部の新隊員は喜んでいたが、将来的に三曹の昇進に響かないか心配する者もいた。

「ルールカ、どうしたんだ？」
「シゲ殿が明日皆で海水浴なるものへ行く者がいないか探しておられたのですが」
「シゲちゃんが？　　ああ、そういや結構前にそんなこと計画してたな」

「タカアキ殿とレプはどうなされる？」

とても同い歳とは思えない老成した口調で、ルールカは尋ねてくる。

自衛隊は縦社会だが、反面、横の繋がりも強固だ。回覧板を回すわけでもないのに、こうして情報があっという間に浸透する。

また、概して志願者は正規隊員、つまり僕のような純正日本人隊員に対して敬意を払う傾向があった。

堅苦しいからやめようや、とある隊員が提案したが、宗主国の人間なのだから尊称されて然るべき、と返されて断念したらしい。

高校を出て間もない多くの新隊員は、宗主国、という言葉の意味を知らなかった。

尊称されようが、されまいが、第二中隊の新隊員同士の結束は硬くなったし、次第に誰も気にしなくなって今に至っている。

「わぅー！　海海ー！」

「行きたいか？」

大きく頷くレプは、どうやら砂漠育ちで海が珍しいらしかった。

海水浴場なら焼きトウモロコシとかかき氷とか売ってるだろう、と教えると目を輝かせた。

「では、私の方からシゲ殿にお伝えしておきましょう」

「ああ。よろしく」

「わぅー！」

二二五〇（午後十時五十分）

ベッドに入った状態で、僕らは一日を締めくくる儀式を迎えようとしていた。
居室の外の廊下から、非常階段を下りてくる当直陸曹の足音が静まりかえった隊舎に微かに響き、
ドアを開ける音と共に廊下に立っていた今日の一班の班当直の新隊員が代表して気をつけの号令を廊下に響かせる。

「報告します。一区隊、班当直三名を除く総員三十三名、事故無し、現在員三十三名。就寝準備完了」
「ん、各班ごと消灯」

若い当直陸曹は本来なら確認すべき居室内の新隊員らの姿を確認することなく、それだけを残してさっさと去って行ってしまう。
二ヶ月を過ぎ、もうミリミリに締め上げなくてもいいだろう、と若い当直陸曹は気をきかせてくれたようだ。
夏制服に教育隊の班当直を表す、白い下地に青い線の一本入った腕章を着けた班当直の姿が居室の入り口に立った。
この夏場に驚くほど白い肌のエルフの若者、セティスだった。
入隊当初、エルフ特有のプライドの高い性格が災いし、班内で一番揉めた人物だった。

まず、エルフと同等か、それ以上の種族は人間と竜族以外はいないという選民意識を持っていた。
防衛庁と外務省、更には文部科学省の協議の結果、
外人隊員の中での民族差別の一掃は日本国憲法の内容からしても絶対条件とされていたため、
種族別に部隊を分けることはあえてしなかった。
そのため、エルフとダークエルフが衣食住を共にするという、
この世界の常識からすれば狂気の沙汰に等しい部隊が誕生することになったのだ。

教育隊での僕らのような正規隊員とのバディ制度も、これに関係している。
あくまで日本人と同じという意識を持たせることが重要だとされていたのだ。それはマスコミへのアピールという側面ももっていたように思う。
入隊当初、面と向かった対立はなかったものの、エルフとその他の種族との目に見えない隔たりは僕らの悩みの種だった。
他にも、ダークエルフは孤立するし、竜族は恐れられるし、獣人は常識がないなど、問題は山積していた。
食堂では、綺麗に種族ごとに席が分かれ、その現実が表面化していた。
だが、さして教育隊は事態を重く見ていなかった。
そもそも、教育隊という場所はそんな単独行動が許されるほど甘い課程ではない。
雪解けが訪れたのは中隊対抗駅伝大会の前の頃だった。
食堂での他中隊との乱闘騒ぎの後ということもあり、ゲテモノ中隊に負けるなという共通意識が駐屯地内に蔓延していたのだ。

中隊朝礼で、中隊長は言った。
？おめえらは負ける？
事実、そうだった。
エルフ族は日本特有の蒸し暑い気候は不慣れで、長距離走はとても無理だった。
竜族は元の姿に戻らねばただの人と変わらないし、あの姿では走ること自体無理な話だ。
頼みの綱は獣人族だが、自衛隊の駅伝大会は原則的にグループ走だ。
つまり、三人一組、五人一組などで一区間を走り、全員がゴールしない限りタスキを渡せないのだ。

第二中隊は大会の公平性を期すとして、単一種族でのグループ走を教育群司令部から禁止されていた。
獣人族だけがぶっちぎりで差をつけるという戦法は通用しない。
中隊内で、エルフ族の立場が悪化した。
頑なな彼らは、自分達だけで練習するばかりで、編成表の多種族と顔を会わそうともしない。
そんなある日、怨敵とされるダークエルフ族の新隊員が訓練場のエルフ族の集団に一人歩いて行って、こう問いつめた。

?中隊の名誉と、お前達エルフ族の名誉と、どっちが重いんだ??

睨み付けてくるエルフ達に怯むことなく、そのダークエルフは冷静だった。

?恥知らずなダークエルフよりは名誉に厚い!?

エルフの一人が吐き捨てるように言い返す。
ダークエルフは静かに首を横に振った。

?俺は中隊の名誉の方が重い。
このニホンという国に部族は救われ、安住の地を約束してもらった。
俺の不治の病だった妹も救ってもらったんだ。
その恩に報いたい。
だからここに志願した。こうしてジエータイインとして取り立てて頂いた以上、部族の誇りや他種族への恨みは二の次だ?

エルフ達の表情は次第に変わっていく。

?俺はこの中隊を愛している。

暗殺者として孤独に生きてきた俺を仲間として迎えてくれたこの中隊を。
お前達は愛していないのか？？

その日が、中隊にとっての転機、いや、もしかしたらこの世界でも歴史的な転機だったのかもしれない。
ぽつり、ぽつりとだが、エルフ族は課業外の合同練習に参加するようになってきたのだ。
僕の班でもセティスが加わり、グループ走のメンバーが初めて全員参加で練習が行われるようになった。
夏に突入し、セティスは少し走っただけで汗だくになって息を切らした。
高校時代に陸上部だった同期は、セティスの弱点を見つけ出し、そこを強化するメニューを組んだ。
セティスは身軽で瞬発力はある。足りないのは肺活量だ。すぐに肺活量を増やすには腹筋を鍛えるといい。
区隊のホープであるレプも、セティスのことをいつも気遣った。
僕は僕で、彼の筋肉痛が酷くならないように、入浴後のマッサージや湿布貼りなどに協力した。
こうして中隊が一つにまとまっていく中、遂に迎えた駅伝大会。
第二中隊は参加チーム十五チームの中、七位という結果に終わった。

大会終了後、しょうがねえな、と苦笑する僕ら正規隊員の横で、泣き崩れる隊員達がいた。
エルフとダークエルフが、共に肩を抱き合って、泣いていた。
ほとんどの異種族隊員達が悔しさのあまり、涙を流した。そこに種族の壁はもうなかった。

セティスは今では皆のことを『盟友』と呼び、末代まで語り継ぐと

大真面目な顔をして話す、相変わらず高慢だが憎めない奴だ。

「消灯する」
「うん、おやすみ」

別に決められているわけでもないのに、電気のスイッチに真正面から向き合い、
まるで魔法でも唱えるかのような真剣な眼差しでスイッチを切るエルフの姿は、いつ見ても笑いを誘った。
真っ暗になった居室内で、ボロのエアコンの音だけがうるさいが、もう慣れた。
今日は華金、明日は休養日だ。新隊員にとって一週間で一番嬉しい日である。
ややあって、十一時を回ったことを知らせる消灯ラッパの吹奏が心地よく耳に入ってきた。
今日は炎天下での基本教練という、戦闘訓練の次にやりたくない訓練だったためか、身も心も疲れ果てていた僕は、
尾を引くような長い消灯ラッパの音を聞き終わらない内に、夢の世界へと旅立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0098y/

バディのいた風景

2011年10月29日02時11分発行